

## 布施鉄治先生を偲ぶ会に出席して

北星学園大学 杉岡直人

1995年6月21日、布施鉄治先生は、足掛け5年の闘病生活のあとに亡くなられました。通夜や告別式という形でなく「故人の意志により無宗教で」（私を含めて多くの人にとって数少ない経験であったと思います）ということで、24日の朝に「故 布施鉄治先生とお別れする会」が開かれ、夕方「偲ぶ会」が行われました。両方の会の締めは、北海道大学寮歌として知られる「都ぞ弥生」を参加者一同で唱いました。学会関係者として東京から出席された安原茂教授と高橋明善教授（日本社会学会吉田民人会長の弔辞代読）そして岩城完之教授がお別れの言葉を述べられました。

「お別れする会」の席で話された方々の思い出が会員の皆さんに布施先生の人と業績を生活史から考える上でおそらく貴重なものと思いますので、ここに一部を引用させて頂きながらご報告させて頂くことに致します。弁護士布施柑治氏を祖父とし、父親が日本経済新聞社の要職を務めていたことが影響していると思われませんが、先生は北海道大学新聞会の編集局長として早くから社会問題に積極的に関心を寄せていました。そのことは、御令息鋼治氏のフリーランスのジャーナリストとしての仕事に継承されております。闘病の中、御令息の文章について晶子夫人に「この文才はさすが、俺の血を継いでいる」と嬉しそうに何度も読み返されていたということです。

東京に生まれた先生は、ご尊父が札幌へ転勤して東京に再び戻った際、入れ替わるように北海道大学へ入学して札幌で生活するようになり、以来「札幌を愛し、北海道を愛し、北海道大学での研究と教育に限りない情熱を燃やした人生」（晶子夫人）を送られました。そして布施先生が何よりも大きな拠り所としていたのは、「日本を代表する社会学者鈴木榮太郎博士の最後の助手を務めたことに研究者としての誇りをもっておられたようでした」（北海道社会学会会長三谷教授）ことと北海道大学教育学部で研究活動を開始された当初、主任教授であった留岡清男教授（日本の矯正教育のパイオニアとして知られる北海道家庭学校（遠軽町に1,000町歩の土地をもつ教育農場）を創設した留岡幸助の四男）の社会科学における実践的課題への姿勢であったと先生自身親しい同僚に語っておられたそうです。

こうした背景をもつ社会学的方法論と実践的価値を統合した研究教育活動は、古典を重視しかつ実証を体系化することにおいてマルクス主義的方法論に依拠しながら、さらに鈴木榮太郎が重視した「生活の論理」体系化へのこだわりと確信を生み出していったといえます。そして、飽くことのない研究と教育への情熱は、「意欲的な弟子に対する愛情と時に怠慢な姿勢をみせる弟子には言葉の鉄拳」（晶子夫人）となって真剣勝負の姿勢を自己と他者に突きつけて妥協を認めない生き方を実践されたこととなります。このことは、弟子や学生の真摯な研究意欲を鼓舞する最大のエネルギーとなり、結果として、リーダーとしての自信と能力が周囲から「布施シューレ（学校）といわれ、しばしば布施軍団とも称された」（酒井恵真教授）ことになったようです。

ところで、布施先生はマルクス主義的方法論の立場をとっていますが、同時に古典をはじめアメリカ文化人類学や社会学の概念についても積極的に検討してきたことをふれておく必要があります。それは、初期の研究業績になる「農業近代化と農民の生産意欲」（北海道大学教育学部付属産業教育計画研究施設1962, 1963）の中に示されている報

酬概念にみることができます。そして、「北海道大学教育学部紀要第65号—布施鉄治教授退官記年号」（1995年1月発行）を見ると小林甫教授の「《生活教育研究》と《生活社会学》の視座—留岡生活教育論・籠山生活構造論と布施生活社会学」をはじめとして、労働生活世界論、A. シュッツ、レギラシオン学派、ベラーとデュルケム、Paul Willis、ゴフマン等を取り上げた13編の論文構成によってその正統的な発展をうかがうことができます。

最後になりましたが、布施先生が都市と農村、産業そして家族、教育の社会学をカバーし、理論的体系化を図り、多くの研究者を送り出してきたことは、ちょうど鈴木榮太郎博士について研究室の諸先輩がしばしばその構想力と人物のすばらしさをカリスマ的心情を含めて語られていることに重ねることができるような気がします。享年64歳の若さであったことからすると、まだまだ多くの仕事を仕上げることができたことと思ひ、残念でなりません。しかし、「妻として、研究と教育のパートナーとして布施と共に過ごしたことを心底良かったと思います」（晶子夫人）と「一人っ子で、一緒に遊んでもらった記憶もなくひたすら机に向かって原稿を書いていた父が多くの方々から慕われ、つき合っていたことに（友人や弟子の方々に）羨ましいと思いました」（ご令息）。そして「皆さんに集まって頂き、お酒を飲んで話しをするのが何より好きだった」（晶子夫人）故人を偲んで、時にワンマンであった故人のエピソードなど懐かしい思い出が次々と語られ、無宗教の送る会が、布施鉄治先生を偲ぶのにふさわしい会となりました。

慎んで布施先生のご冥福をお祈り申し上げます。